

学校給食部会

星名久美子

作り手と食べる側の心が通う給食を

今年から小学校の新学習指導要領に

「食育」が明確に位置づけられました。

しかし、すでに学校の特質を生かした食育が様々な学校で実践されています。そこで学校給食部では、「学校給食」を原点として食育活動を見直すために学級担任から給食指導、食育授業の実践報告をしてもらうことにしました。

集団給食の花開く

まず、A先生から四〇年近い歴史を振り返って報告してもらいました。

初めの一〇年は「感謝して食べる」ことを、子どもたちに体の健康面で押しつけていた。次の一〇年は「において今日の給食がわかる学校」に異動し「熱心な栄養士」と出会い、学級づくりと結び付けた給食指導を実践してきた。栄養士

と一人ひとりの子どもを見つめ、作り手

と食べる側の心が通い合う、家庭と同じにおいがする給食を大事にした食育実践をしてきた。その次の学校で受け持った二年生の学級は、四時間目が終わると手を洗うどころか廊下でけんかや追いかけて、好きなものは先を争い嫌いな物はたくさん残る。食べ終えると教室を抜け出す。このような学級崩壊に近い状態で、大事にしたのが次の四点だった。①ルール作りと家庭への訴え②子どもたちの願いを頼りに毎日だす学級通信③自治能力の向上④食事マナーの訴え。これらを進めていくうちに、トイレを済ませ手を洗う机を拭き、静かに着席。ほとんど毎日残食ゼロ。後片付けもバッチリ。嫌いな物も少しずつ食べるようになった。

このように四〇年近い教職のなかで得

た「学級づくりの基礎は給食指導」という指導の結果、集団給食の力が花開き、子どもたちは「自分たちで何とかしなければ」という前向きな姿に変わったという報告でした。

栄養士と教諭の役割を明確にして 作り上げる食育指導

次に、採用七年目という若いB先生から「教科の学習を深める食育の工夫」とした食育実践の報告です。国語の「詩を味わおう」、理科の「生きていくための体の仕組み」など身近な教材「食」を扱うことで教科に無理なく食育を取り入れ知識を持たせることで意識を高めさせることができたという実践でした。

また学校栄養士退職後保育園の園長になった先輩栄養士からは管理職を巻き込んだ食育実践の報告なども受けました。食育で大切にしなくてはならないのが毎日の給食時間であり、給食内容です。食は人を作る大きな柱となります。生きる力の基になる「食」について皆で語り学びあいましょう。

(杉並・方南小)